



## 緩い制限（日本国民は）なぜ従った？…

安倍首相は先月の26日、緊急事態宣言の解除を表明した際、「日本の感染症への対応は、世界において卓越した模範である。まさに日本モデルの力を示したと思います」と、国民への感謝の意を込めつつも“自画自賛”しました。ワシントン・ポスト紙も、「日本のアプローチは独特で、政府の命令や制裁よりも、要請・合意・社会的圧力によって封じ込めた」と論評し、WHOのテドロス事務局長も、



「死者数を最小限に抑え、新型コロナウイルスの感染拡大防止に成功した」と日本を評価し始めました。欧米諸国や中国、韓国などに比べ、PCR検査を実施した件数が少ないことで、日本のコロナ対策を“生ぬるい”と批判的な文脈で報じることが多かった時と比べ、“手のひら返し”の褒めようぶりです。（日本は“不思議の国”で、都市封鎖に代表されるような、強力な措置を全く講じなかったのに、死者数が少ない。その原因を知りたくてたまらない…）そんな折、読売新聞（5月28日）【コロナに思う】緩い制限 なぜ従った？…哲学者萱野稔人津田塾大教授の論考は、（事務所通信第271号にてご紹介しました養老孟司氏の論考にも匹敵するもので）ワイドショーなどのコメンテーターがコロナ感染への恐怖を必要以上に煽り、それに踊らされ一喜一憂する風潮の今日、感銘深く格調高く感じられました。

『成熟した現代で当たり前認められてきた私たちの「自由」は、コロナ禍のような有事では制限されうる。自由とは、平和で豊かな社会でこそ、尊重される価値だと改めて気づかされました。日本では、自由は他人を害さない範囲で認められてきました。今回でいえば、好き勝手に外出する人が増えれば、感染拡大を招き、多くの人に不利益が生じるわけです。自由の制約の度合いは、国や地域ごとに違います。欧米諸国は、ロックダウン（都市封鎖）で移動を厳しく制限しました。韓国は、携帯電話の位置情報などから感染者の行動履歴を公開し、平時ならプライバシー侵害とも言える対策を取りました。国が強い権限を持って対策を進め、結果的に早く個人の自由を取り戻す。自由と制約は対立する概念とも考えられてきましたが、必ずしもそうではないのです。日本は「自粛の要請」という緩い制限でした。でも、街を出歩く人は確実に減り、感染者は減少に転じました。強制力がないのに、なぜ大勢の人が従ったのでしょうか。日本人が「同調圧力に弱いから」という意見もあります。ただ、私は、日本ならではの権力との付き合い方が背景にあると見ています。SNSなどを見ると、国への不平・不満の声もあふれていました。「自粛要請に従う。だから、しっかり私たちを守れ」という権力との独特の取引関係が根づいているのでしょうか。自由はどの程度、制限されるべきか。権力とのバランスはどうあるべきか。古典的なテーマが今、再び問われている気がします。』



萱野 稔人 氏

これからは、「新しい生活様式」が模索される新段階に入ります。  
しっかり考えて対応していきたいものです！

